

令和元年6月18日現在

機関番号：32503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02308

研究課題名(和文) 文化的記憶としてのイギリス多文化主義についての研究

研究課題名(英文) A Cultural Memory Study of Multiculturalism in the U.K.

研究代表者

三村 尚央 (Mimura, Takahiro)

千葉工業大学・工学部・准教授

研究者番号：90514795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、人文学系の研究の中で近年注目されている「文化的記憶」という概念の分析ツールとしての役割を深く考察した。文化研究における記憶は未分化の部分が多い領域であるが、本研究では「記憶術と空間的布置」「記憶の物品と記念碑」「記念行事と集合的記憶」といった領域に分類した。その結果、「文学」および「歴史」、「儀式」といった領域を「記憶」という観点から、包括的に論じる手法を検証できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は「文学」および「歴史」、「儀式」といった領域を「記憶」という観点から包括的に論じる手法を検証した。たとえば移民を扱う文学作品に描かれる歴史的場面の働きを深く理解できるようになっただけでなく、移民として英国に渡ってきた祖先を想起する記念式典でその作品が言及される意義についても詳細に考察することができた。その結果「文化的記憶」という概念の分析ツールとしての役割を深く考察できた。本研究の成果はイギリスに限らず、今後の日本における記憶の文化を研究する際にも応用できるだろう。

研究成果の概要(英文)：This study explores the idea of "cultural memory" and its function as a critical tool. Memory studies is still in its initial stage, so I categorized it into "art of memory and spatial understanding," "memory object and monuments," and "commemorative rituals and collective memory." As a result, I have considered it in detail as an analytical method to study literature, history and commemoration from the perspective of memory.

研究分野：イギリス文化

キーワード：記憶研究 イギリス文学 移民 多文化主義 ノスタルジア カズオ・イシグロ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究を着想したのは、イギリスの文化研究において「記憶」特に「集合的記憶」という観点から分析したものが今まで整備されていなかったからである。文化および歴史の研究は、「イギリス文学」および「歴史」と分けられており、両者のあいだに密接な関係は認められていたものの、確固とした事実の集積としての歴史が文化的虚構産物に反映されているという主従関係は揺らぐことがなかった。そこで本研究では両者の関係をより相互作用的なものとして見直すことを目指した。

2. 研究の目的

イギリス研究において別々の手法を用いて論じられることの多い「文学」および「歴史」、「儀式」などを「記憶」という観点から包括的に論じる分析的な批評方法を立ち上げることが本研究の目的である。特にイギリス国内および国外に向けて 1950 年代以降盛んに展開された「多文化国家」としてのイメージがいつ、どのように形成されたか、ということとそのイメージが「多文化国家イギリス」へと国民をまとめ上げる文化装置として持つ機能を分析、記述することである。

3. 研究の方法

しばしば「事実」と結びつけられがちな「歴史」という用語に代わるものとして、より柔軟な可塑性を含む概念である「集合的記憶」(collective memory)あるいは「文化的記憶」(cultural memory)を導入する。そのことで個人的な生活および活動と、集団的な社会活動それぞれにおける過去の想起と継承について考察する。

4. 研究成果

平成 27 年度は理論的な基盤を確立するために、近年盛んとなっている「文化的記憶」および「集合的記憶」を含む記憶研究についての先行研究を参照しながら概要をまとめた。20 世紀後半になって、従来は「文化」や「歴史」、「トラウマ」といった別々の範疇で扱われていた事柄が、「記憶」というテーマのもとで新たに論じられて関連づけられるようになったため、本研究において扱う「記憶」の定義と範囲を明確にするためにも不可欠な作業であった。その過程で明らかになったのは、記憶についての理解や思索は、現代的な生物学および認知科学的なアプローチ以前から連綿と練り上げられてきたものであり、また現代的な科学理論にもとづく理解に取って代わられたり、排除されたりするものではなく、それらと補完しあいながら人間の自己認識の深化に寄与するものだということであった。本研究では Anne Whitehead の論などを参照しながら、古代の記憶術からイギリスの啓蒙主義哲学、そしてロマン派の詩などを参照し、いかにして記憶が当時の人間や精神活動についての見解に影響を与えていたかを整理した。記憶は個々人の脳内だけで完結している精神活動ではなく、物理的な品物や周囲の環境などの外的な要因からの刺激と織り合わされながら刻まれた後、想起されるという二つの工程が合わさったものである。その後の研究の基礎として、記憶研究を「記憶術と空間的布置」「意識と無意識」「記憶の物品と記念碑」「記念行事と集合的記憶」といった領域に分類して文献等の資料をまとめた。本年度の研究成果として、Anne Whitehead, *Memory* (Routledge, 2009) の翻訳書を『記憶をめぐる人文学』というタイトルで平成 29 年に出版した。

平成 28 年度はイギリス文化の一環としてのイギリス文学において、「イギリス人であること」や「記憶と主体性の形成」、「グローバル社会の中のイギリス文化」といった問題がどのように扱われ、表現されているかという点に焦点を絞って研究を行なった。その成果として、「イギリス文学における市民性(シティズンシップ)」、「移民作家にとっての記憶」、「新自由主義の中での芸術の役割」というテーマに基づいて文学テクストを論じる 3 件の学会発表を行なった。市民性の問題は 1950 年代以降に急激に移民が増加した結果、多民族教育が進められたイギリスに暮らす人びとにとっては、解決するどころか深刻な問題となっていた。それは移民だけではなく白人たちにとっても同様であった。このような観点から、1995 年に出版された Kazuo Ishiguro の *The Unconsoled* は人びとがコミュニティの中での居場所を模索する作品として読むことができる。

国際化とグローバル化によって人びとの移動力を増大した結果、複数の場所で暮らすことは珍しくなくなった一方、離れた土地へのノスタルジアは現代においてこそかつてないほどの高まりを見せている。ドイツ系のイギリス作家 W・G・ゼーバルトの作品群は、このようなノスタルジアが現実的な土地の移動がない人びとにとっても重要になっていることを示している。彼の代表作『アウステルリッツ』ではイギリスに暮らしていた青年が、実は自分がナチスドイツによるホロコーストと関連があることを知るが、このような自らのルーツをめぐる物語は多文化化の進むイギリスにおいても次第に増えている。こうした特徴について、多くの植民地を抱えてイギリスが、現在はそれらの植民地の多くが独立しながらも緩やかにつながっている状況を反映しているのだというポストコロニアルの視点から解釈する論者も多々いる。

また、グローバル化のなかで自らの位置を確保するために何らかの技術を身に付けることが求められている。カズオ・イシグロ(Kazuo Ishiguro)の『私を離さないで』(*Never Let Me Go*)を注意深く検証すれば、このような時代の雰囲気を反映したものとして、アートの重要性が強調されていることに気づけるだろう。

平成29年度は、本研究課題である文化表象における記憶の問題のなかでも、特に文学に焦点を当てる研究を行った。平成29年度の前半4月より9月頃まで、研究代表者の中心的な研究対象であるカズオ・イシグロについての3回の研究会を集中的に開催した。多くの文学研究者と議論を交わしながら、記憶表現を含めたイシグロ作品のさまざまな側面についての議論を深めることができた。そしてその総括として8月にはカズオ・イシグロの『私を離さないで』(Never Let Me Go)をテーマとしたシンポジウムを開き、イシグロの研究者たちとともに理解をさらに深化させることができた。その中でイシグロの文体上の表現技術がイギリス文化に根づく「庭園と記憶」という主題の系譜に連なるものであることを確認した。また記憶の文化研究に関するイギリスの研究者による書籍の翻訳も出版した。これにより、記憶の文化研究について広く一般に浸透させるための基礎整備を進めることができた。この訳書の出版に伴って、記憶の文化研究についてのイベントに参加する機会もあり、文学や哲学、人類学の知見を含めた、包括的な記憶の文化研究の可能性について検討する多くの機会を持った。その後、10月にイシグロがノーベル文学賞を受賞したことで、イシグロについての記事を執筆したり講座を担当する機会が増えたが、4月より9月頃に行った研究活動の最新の成果を盛り込みながら発表することができた。

特に、イシグロ作品をヨーロッパにおけるホロコーストの記憶と関連づけるロバート・イーグルストーン(Robert Eaglestone)の議論は本研究において重要な位置を占める。ヨーロッパ全体を巻き込んだホロコーストという巨大な人種差別的大虐殺の事件の記憶とどのように折り合いをつけるかということは、アライダ・アスマン(Aleida Assmann)ら多くの文化批評家たちが研究対象としている。イシグロ作品は直接的にホロコーストを扱っているわけではないが、イーグルストーンは特に『私を離さないで』を取り上げて、自明であるはずの暴力を直視せずあいまいなままして日常的な生活を送っている人物たちの姿勢に、ホロコーストの記憶をめぐる文化的記憶研究の成果を接続しようとしていると言える。

平成28年度と29年度の研究成果をふまえて、平成30年にイシグロに関連した2冊の書籍(『カズオ・イシグロの視線』、『カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を読む』)を編著した。

最終年度である平成30年度は「儀式」あるいは「記念行事」を通じた記憶の継承についての研究を進めた。具体的には1948年にカリブ地域からの大量の移民を乗せてイギリスに到着した汽船エンパイア・ウィンドラッシュ号をめぐる記憶に着目した。この出来事はイギリスの多文化化のはじまりを刻むものとして、しばしば公的にも回顧され、2012年のロンドン五輪の開会式でもウィンドラッシュ号の到着場面が再現されていた。しかしよく知られているようにこの出来事以降、大量の移民が流入した結果イギリス国内では彼らに対する人種差別が激化した。

本研究において、この出来事の記憶が70年を経た現在どのように継承されているかを調査することを試みた。その実地調査としてエンパイア・ウィンドラッシュ号の到着70周年を記念して、2018年6月にイギリス、バーミンガムの教会で行われた式典を調査のために実際に訪れた。そこでまず確認できたのは、ジャマイカなどカリブ地域からの移民の子孫としてイギリスで生まれ育った世代の彼らが、それぞれの親や祖母たちについての個人的な経験を自分たちの共同体を支える集合的記憶として共有していることであった。彼らの子や孫の世代はイギリスでイギリス人として生まれ育ったものがほとんどで、両親や祖母の経験は、彼ら自身のものとは異なっているにもかかわらず、彼らの苦難があってこそ現在の自分たちがあることを確認しようとしているように思われた。先人たちの貢献だけでなく、彼らが持っていた気づかいや不安について想起、感謝(thank) 記念(commemorate)する会だった。移民第一世代の苦難が、彼らが「見えなくされていた(invisible)」という言葉が繰り返されていたのも印象的であった。つまり、世代と血縁の間での断絶を超えるために、個別的な記憶が「私たち」のものとして共有されて、彼らの共同体の現在を維持してゆくための仕組みであることが確認できた。

本研究での全体期間を通じて特に注目してきたのは「文化的記憶」(cultural memory)と「第二世代」(second generation)という論点であった。文化的記憶という理論モデルは、個人的

Opening Prayer by Bishop David
 Reading Psalm 27
 Reading from Andrea Levy's *Small Island*
 Reading 1 Corinthians 13:1-7
 Choir
 Hymn 249 *Great is thy faithfulness*
 Reading Mark 10: 46-52
 Music
 Sermon by Revd. Canon Eve Pitts
 Prayer of Patience by Bishop David
 Monologue by Jenny Phillips
 Hymn 715 *We have a dream*
 Prayers of intersection by Mrs. Christian
 Prayer of Thanksgiving
 Lord's Prayer
 Silence
 Notices
 Final hymn 29 *Amazing Grace*
 Blessing by Bishop David

表1：記念式典次第

なものと関連づけられがちな記憶が人びとのあいだで共有されてゆく仕組みを可視化したもので、20世紀初頭にフランスの社会学者モーリス・アルヴァックスによって提唱された集合的記憶の概念を発展させた理念である。そしてしばしば記憶と対立させられがちな「歴史」のように固定化したものではなく、仮想性を備える性質を強調するために「文化的記憶」と名づけられた。また「第二世代」問題は共同体内で家族も含めた成員の世代間での記憶の継承に焦点を当てる。そして本研究においては特に、親や祖父母世代の個別的な経験や記憶が、それを直接体験していない子孫へと伝えられてゆく仕組みやそのための媒体について検証して、「儀式」(commemoration)や「口承」(oral history)、「記憶の物品」(testimonial objects)といった要因に着目し、なかでも「儀式」の役割についての分析と理解を深めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

三村尚央、Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go* が示す想像力による抵抗の可能性、*New Perspective*、査読有、49巻、1号、2018、48-55

三村尚央、Kazuo Ishiguro の小説作品における「アート」の役割 *Never Let Me Go* を中心に、広島大学英文学会、査読有、62巻、2018、91-104

三村尚央、より良きノスタルジアのために カズオ・イシグロ『わたしたちが孤児だったころ』、ユリイカ 特集カズオ・イシグロ、査読無、2017年12月号、177-185

三村尚央、記憶はジェンダー化されるのか 記憶とジェンダーの関係についての一考察、*New Perspective*、査読有、47巻、2号、2017、29-33

〔学会発表〕(計4件)

三村尚央、開かれたディストピアのパラドックス Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*、新英米文学会第48回大会(2017年8月20日)

三村尚央、Ishiguro 作品における「アート」の役割、日本英文学会中国四国支部第69回大会(2016年10月30日)

三村尚央、写真的記憶の深い表層—20世紀イギリス作家の記憶観の変遷をさぐる、日本英文学会中部支部第68回大会(2016年10月15日)

三村尚央、Kazuo Ishiguro の *The Unconsoled* をシティズンシップ小説として読みほどこく、日本英文学会第88回大会(2016年5月29日)

〔図書〕(計3件)

田尻芳樹、三村尚央他、カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を読む、水声社、2018年
莊中孝之、森川慎也、三村尚央他、カズオ・イシグロの視線 記憶・想像・郷愁、作品社、2018年

アン・ホワイトヘッド著、三村尚央訳、記憶をめぐる人文学、彩流社、2017年

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。